

ペスタロッチー教育賞 受賞者紹介

歌手・俳優 法務省特別矯正監・
厚生労働省特別健康対策監・警察庁特別防犯対策監

すぎ りょう た ろう
杉 良 太 郎 氏

1944年8月14日に兵庫県神戸市に生まれる。歌手や俳優として活動するだけでなく、デビュー前から福祉活動にも携わってきた。長年の刑務所や施設における慰問活動を通じて法務省・特別矯正監、厚生労働省・特別健康対策監、警察庁・特別防犯対策監に永久委嘱される一方、ベトナムやバングラデシュをはじめとするアジア諸国から、アメリカ、ブラジルなど様々な国において孤児や障がいのある人々への支援を地道に積み重ねてきた。その長きにわたる活動は各方面から表彰され、2008年緑綬褒章、2009年紫綬褒章を受章、2016年には文化功労者に選出されている。

幼き頃から苦勞する母親の姿を見て育ち、「楽にさせてあげたい」との思いから好きだった歌の道を志し上京。知り合いのカレー屋での奉公を経て、1965年に歌手デビューを果たした。代表曲『すきま風』『明日の詩』をはじめ、人の弱さや孤独に寄り添う楽曲は世代を超えて歌い継がれている。1966年には東京12チャンネル（現・テレビ東京）開局記念番組『燃えよ剣』で俳優デビューし、翌年NHK『文五捕物絵図』で主演を務め、一躍脚光を浴びた。同番組は異例の半年間放送延長を記録。その後も『遠山の金さん』『右門捕物帖』『新五捕物帳』など、時代劇を中心に1400本以上の作品に主演し、歌手としての情感豊かな表現力と俳優としての確かな存在感を兼ね備えた稀有な表現者として、日本の大衆文化に長く貢献してきた。舞台活動にも精力的に取り組み、1969年に京都・南座で初座長を務めて以来、演劇の世界でも活躍の場を大きく広げた。「リアリズムと様式美」の融合を追求し続け、独自の表現様式として「杉演劇」を確立した。大阪・新歌舞伎座では前人未到となる50回連続出演の記録を打ち立てるなど、多くの観客を魅了してきた。

杉氏が福祉活動に従事したのは、芸能活動で成功を収めたからではない。デビュー前からすでにこの問題を自分が取り組むべき課題と捉え、活動を始めていた。最初のきっかけは15歳のとき、歌のレッスンの先生に連れられて刑務所や養老院を訪問したことであった。以降杉氏は、刑務所や施設の慰

問や視察、ベトナムでの里子支援・教育施設への援助など、様々な福祉活動に携わってきた。最近では拘禁刑の施行にともない、自らの経験をもとに保護犬の世話などを通じて受刑者の自立を促す矯正教育のあり方を提言したり、チャリティ公演を契機に始まったベトナムでの盲学校支援活動など障がいのある子どもたちへの支援や、山岳地帯の通学に困難を抱える子どもたちへの教育支援に取り組むなど、自らを省みない「献身」の姿勢を貫いている。

とりわけ、バングラデシュ・ダッカの孤児院を訪れた際の体験は、杉氏の福祉観を象徴している。栄養失調のため、子どもたちはロボットのようにほとんど動かず、瞬きさえできない状態だった。手元にあった飴玉を一つ渡すと、その子は飴をじっと握りしめ、5、6秒かけてようやく舐めたという。施設を回り終え、「すぐに食べ物を持って帰ってくる」と声をかけた瞬間、それまで動けなかった子どもたちが一斉に手を振った。その光景に、わずかな糖分が命の力を呼び戻す現実を突きつけられ、人間の尊厳とは何かを深く問い返されたと言っている。

「献身」を「頑張って、頑張って、苦しんで、苦しんで、のたうちまわって、やっと相手に喜んでもらえる」（『生涯献身』徳間書店、2025年、261頁）とする杉氏にとって、その活動は絶えず自分自身を問い直す営みでもあった。たとえば、チャリティーコンサートのためにベトナムを訪れた際には、周囲から差別的な眼差しを向けられるハンセン病の人たちに手を差し伸べながらも、「もっとできたことはないか」と自らの行いを自問自答して苦しんだという。熊本県のハンセン病の慰問活動でも自らの活動のあり方を問い直し、療養所で「遠山の金さん」の舞台を上演するため試行錯誤を繰り返した。手の不自由な観衆が身体をぶつけ合いながら拍手で応えてくれた姿に、「真実」の拍手・笑顔・涙を経験できたと杉氏は述べている。

ときに「偽善」との批判を受けながらも、福祉は「ありがとう」の見返りを求めない一方通行だと捉える杉氏の活動は、草の根の慈善から始まり、国内外へと広がり多くの共感を呼んでいる。私財を投げ打ちながら、かけがえのない平和を追い求め、社会の周縁に置かれてきた子どもたちや人々に手を差し伸べ続けてきたその歩みは、孤児や貧困児の救済と教育に生涯をかけて尽くしたペスタロッチーの理念と実践に通じるものである。ここに第34回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、その類まれにして優れた功績を顕彰したい。